関西大学による林原美術館蔵池田家伝来資料の調査と研究

―報告と中間総括―

山本登朗　田中　登
山本　卓　乾　善彦
植野哲也　中尾和昇
橋本　龍

一　調査研究の始発と経過

①　関西大学研究拠点形成支援経費による共同研究「地域文化資源をプラットフォームとした地域共同活動の創生拠点形成」

関西大学は、二〇一五年八月に林原美術館との間に連携協定を締結しており、それに基づいて、関西大学研究拠点形成支援経費を受けて行われていた共同研究「地域文化資源をプラットフォームとした地域共同活動の創生拠点形成」（代表・与謝野有紀教授）の一環として、林原美術館所蔵品の調査が進められた。その成果のひとつとして、関西大学文学研究科大学院生・坂本美樹による『隣女和歌集』（第一巻）の発見など、貴重な資料の発見・紹介があり、二〇一七年三月二九日には記者発表も行われて、多くの新聞誌上で報道された。

それを受けて、林原美術館所蔵の池田家伝来資料に対する網羅的な調査が必要であるという認識のもと、試行的な悉皆調査が開始された。山本登朗が実施分担者となり、共同研究「地域

文化資源をプラットフォームとした地域共同活動の創生拠点形成」の一環として行われた調査は一二日間、調査点数は一二五件（五八四点）に及んでいる。また、資料の撮影も四日間にわたって行われた。

その成果報告として、二〇一八年三月一八日には、グランフロント大阪北館・ナレッジキャピタルザ・ラボ・アクティブスタジオにおいて「〈報告会〉林原美術館コレクションと地域文化への貢献」が開催されている。

② 関西大学教育研究緊急支援経費による共同研究「林原美術館所蔵資料の総合的調査―岡山池田藩藩主の文事と岡山の文化を探る―」

以上のような経緯をふまえつつ、林原美術館所蔵の池田家伝来資料の悉皆調査をさらに継続して進めるため、山本登朗を実施代表者とする新しい研究チームが作られ、関西大学から教育研究緊急支援経費を受けて、二〇一七年一二月一日から二〇一八年一一月三〇日まで、「林原美術館所蔵資料の総合的調査―岡山池田藩藩主の文事と岡山の文化を探る―」というテーマのもとに、さらに本格的な調査と研究が行われた。その間の調査日数は一三日、調査点数は二二五件（六三八点）、資料撮影は七日間行われた。

研究チームの構成は次の通りである。

実施代表者　山本登朗（関西大学文学部教授）
実施分担者　田中　登（関西大学文学部教授）
　　山本　卓（関西大学文学部教授）
　　乾　善彦（関西大学文学部教授）
　　植野哲也（林原美術館主任学芸員）
　　中尾和昇（奈良大学講師）
　　橋本　龍（林原美術館主任学芸員）
実施協力者　与謝野有紀、浅利尚民、河田昌之、
　　惠阪友紀子、北井佑実子、黒澤暁、坂本美樹、
　　槌田祐枝、中葉芳子、福留瑞美

③ シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事―お殿様と王朝文化―」

共同研究「林原美術館所蔵資料の総合的調査―岡山池田藩藩主の文事と岡山の文化を探る―」の調査と研究をふまえ、二〇一八年九月一六日、岡山県立図書館多目的ホールにおいて、

関西大学学長・芝井敬司氏、同文学部長・藤田高夫氏、林原美術館館長・谷一尚氏の臨席のもと、シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事―お殿様と王朝文化―」が、関西大学と林原美術館の共催行事として以下のように開催された。（写真参照）

挨拶　関西大学学長　芝井敬司氏
　　林原美術館館長　谷一　尚氏

講演　林原美術館蔵古筆手鑑の『明月記』断簡
　　東京大学史料編纂所准教授　藤原重雄氏

報告①　池田光政筆の和歌集
　　―『風葉和歌集抜書』と『射山百首和謌』―
　　ノートルダム清心女子大学准教授　原　豊二氏

報告②　池田光政筆「古筆臨模聚成」の意義
　　関西大学教授　田中　登

報告③　和歌の学びと交流
　　―池田綱政と広島藩・浅野綱晟―
　　関西大学非常勤講師　中葉芳子

報告④　池田綱政の文事
　　―『伊勢物語』屏風断簡、艶書合五種その他―
　　関西大学教授　山本登朗

シンポジウム　谷一尚氏、藤原重雄氏、原豊二氏、田中登、福留瑞美、
　　（司会進行　山本登朗）

閉会の辞　関西大学文学部長　藤田高夫氏

これと同時期に、林原美術館では、特別展「王朝文学への憧れ　歌・物語に染まる、もののあはれ」（二〇一八年九月一五日～一一月四日）が、関西大学協賛のもとに開催されている。

シンポジウム　ポスター・チラシ

なお、二〇一八年一二月一三日の「山陽新聞」に、上記のシンポジウムも含めた関西大学チームによる調査研究の内容が、多くの写真とともにくわしく掲載・紹介された。

④　関西大学教育研究高度化促進費による共同研究「林原美術館所蔵資料の総合的調査―林原美術館との連携強化のために―」

その後、乾善彦を実施代表者とする研究組織が新しく組織され、関西大学教育研究高度化促進費を受けて、二〇一九年四月から三年間の予定で、「林原美術館所蔵資料の総合的調査―林原美術館との連携強化のために―」という研究題目のもと、林原美術館所蔵の池田家伝来資料の悉皆調査と、そのデータベース化の作業、および同資料についての研究が、現在も継続して進められている。

二　調査研究の目的と意義

林原美術館所蔵の池田家資料については、これまでさまざまな形で、優れた美術品や学術的価値の高い文献が紹介されてきたが、それらは単独で紹介され、研究されることはあっても、それらを生み出し保持してきた池田家の文事のいとなみの総体の一部として捉えられたことは少なかった。今回の研究は、そのような過去の研究とは異なり、伝来資料の総体を悉皆調査に近い形で調査し、個々の資料を、その総体の中で、すなわち岡山池田家当主の文化活動全体の中で捉え、考えようとするものである。

これによって、岡山池田藩という有力な藩の藩主が、江戸時代という時代に、和歌や俳諧や美術、さらにはその他の文化全般に関して、どのような活動を行っていたか、その全体像が明らかになり、それによって、城下町岡山の文化がどのように形成されたかについても、考える手がかりを提供することができるはずである。

そのようなアプローチが可能なのは、林原美術館に藩主代々の自筆を中心とする資料が、幸いにも大量に、良好な保存状態で残されているからである。戦災によって岡山城が炎上した際も、幸いに文書が保存された蔵は火災を免れ、そのままの形で残された。そのうち、岡山大学池田家文庫となって整理公開された資料は広く研究されているが、その多くは藩政資料であって、絵画や文学作品などはそれほど多く含まれていない。それ

に対して、現在林原美術館が継承している資料には、甲冑や能衣装などとともに、藩主の自筆資料や、藩主自身に関わりの深い貴重な文献、絵画などが数多く、ほぼ原状のままに残されている。そのように保存されてきた文献、特に文学関係資料の数はおびただしく、それらについては、これまでごく一部しか研究されてこなかった。

本研究では、そのような希有の資料の価値を再評価し、それらを有効に活用することを目的として、関西大学と林原美術館の連携という条件を十分に生かしつつ、総合的な探究をできるかぎり進めてきた。

三　調査研究の成果発表（二〇一九年までの口頭発表と論文）

山本登朗（実施代表者）
（口頭発表）池田綱政の文事―『伊勢物語』屏風断簡、艶書合五種その他―　シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事―お殿様と王朝文化―」二〇一八年九月

田中登（実施分担者）
（口頭発表）池田光政筆「古筆臨模聚成」の意義　シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事―お殿様と王朝文化―」二〇一八年九月

中尾和昇（実施分担者）
（口頭発表）大名の紀行文―岡山藩池田家の文事―　報告会「林原美術館コレクションと地域文化への貢献」二〇一八年三月

北井佑実子（実施協力者）
（論文）池田光政筆「古筆臨模聚成」における『貫之集』古筆切三首　『国文学』（関西大学国文学会）一〇三号、二〇一九年三月

坂本美樹（実施協力者）
（論文）新出資料・林原美術館所蔵『隣女和歌集』（巻一）三本の紹介　『関西大学博物館紀要』二三号、二〇一七年三月
（口頭発表）伝寂連筆本『大江千里集』の考察―林原美術館本の本文系統について―　和歌文学会関西例会（於大阪大学）二〇一八年一二月
（論文）伝寂連筆本『大江千里集』の考察　『国文学』（関西大学国文学会）一〇三号、二〇一九年三月

中葉芳子（実施協力者）
（口頭発表）林原美術館所蔵「道成寺」下絵」―「日高川草子」と岡山藩主池田家―　報告会「林原美術館コレクションと地域文化への貢献」二〇一八年三月
（口頭発表）池田光政筆「古筆臨模聚成」の意義　シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事―お殿様と王朝文化―」二〇一八年九月

福留瑞美（実施協力者）
（口頭発表）飛鳥井雅章添削の和歌を介して交流した池田綱政と浅野綱晟　報告会「林原美術館コレクションと地域文化への貢献」二〇一八年三月
（口頭発表）和歌の学びと交流―池田綱政と広島藩・浅野綱晟―　シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事―お殿様と王朝文化―」二〇一八年九月
（論文）近世大名による和歌の学びと交流―岡山藩・池田綱政と広島藩・浅野綱晟―　『国文学』（関西大学国文学会）一〇三号、二〇一九年三月

四　今後の課題と展望

今回の関西大学教育研究緊急支援経費による調査と研究は、期間がわずか一年であったこともあって、まとまった成果を完全な形で示す前に終了せざるを得なかったが、幸いなことに、この調査・研究は、乾善彦教授を代表とするチームによって、関西大学教育研究高度化促進費を受けて、二〇一九年度から三年間、引き続き進められることになった。これまでの悉皆調査の継続とともに、所蔵資料のデータベース作成が行われる予定だが、調査資料に基づく研究活動も、多くは今後の課題として残されている。

期待される研究テーマの第一は、特に池田綱政を中心とする岡山池田家の和歌活動の全体的解明である。林原美術館所蔵池田家資料の多くは、おびただしい数の詠草類である。誰が、どんな歌を、どのように詠んだのか、指導者であった飛鳥井家との関係や、池田綱政と広島藩・浅野綱晟の歌道を通じての交流などは、すでに福留瑞美によって解明され始めているが、まだまだ未調査の資料は多い。あらたな研究テーマの発掘も望まれるところである。

林原美術館所蔵池田家資料の中で注目されるのは、池田光政、

綱政などの当主が多く自筆で書き残したおびただしい数の歌集写本や物語の断片、そして詠歌の参考にされたと思われるさまざまな書物の写本である。特に光政の精力的な書写活動には驚嘆すべきものがある。そのひとつの集成ともいうべき「古筆臨模聚成」については、田中登、北井佑実子、中葉芳子によって研究成果が提示されているが、まだまだ残された部分は多い。歌集写本については坂本美樹が研究成果をあげているが、こちらについても多くの課題が残されている。さまざまなものが混在する断片的書写の資料についても、それらをどのように意義づけていくことができるのか、今後考えてゆく必要がある。

さらに解明されねばならないのは、これもおびただしく残されている、藩主自身やその周辺の人々によって描かれた絵画資料である。綱政をはじめ、池田家当主には画才に優れた人が多く、さまざまな絵師との関わりも多かった。現存する多様な内容・形式の種々多様な絵画資料の整理と考察は容易ではないが、藩主による自筆絵画や藩主周辺で描かれた絵画がこれほど集中的に残されている例は他にそれほど多くはない。時間をかけた取り組みが望まれるところである。

林原美術館所蔵池田家資料にはまた、藩主の妻や娘など、女性の手になる文筆資料、および絵画資料がおびただしく残されている。大名家の文化活動の研究は近年盛んだが、その中での女性による文化活動に注目した研究はそれほど多くはない。江戸時代は、実は女性が大きく活躍した時代であった。林原美術館所蔵池田家資料には、その一端を明らかにすることができる厖大な文化活動の痕跡が残されている。それらの調査と研究は、今後の大きな課題のひとつである。

その他、名園として知られる後楽園と文事との関わりや、藩主が熱心に取り組み、面や衣装も数多く残されている能楽と文事との関わりの考察、熊沢蕃山などの儒学についての検討も、今後に残された重要な研究課題である。

このようにさまざまな課題が残されているが、林原美術館所蔵池田家資料にはなお、上記でも述べ得ない多様な要素、さまざまな魅力が含まれている。それらの解明は、城下町として発展してきた岡山の文化の源泉のひとつを解明することでもある。現在の岡山の都市文化の考察にもつながる魅力的な研究が、今後さらに総合的に進められてゆくことを願うものである。

〈付記〉

本稿は、二〇一六年度～二〇一七年度関西大学研究拠点形成支援経費を受けて行われた共同研究「地域文化資源をプラット

フォームとした地域共同活動の創生拠点形成」（代表・与謝野有紀教授）、および二〇一七年度～二〇一八年度関西大学教育研究緊急支援経費を受けて行った共同研究「林原美術館所蔵資料の総合的調査―岡山池田藩藩主の文事と岡山の文化を探る―」（代表・山本登朗）の成果について、連名筆者七名によって共同執筆された報告である。

調査研究にあたって、貴重な資料の閲覧および撮影をお許しいただいた林原美術館の御厚情に心より御礼申し上げる。